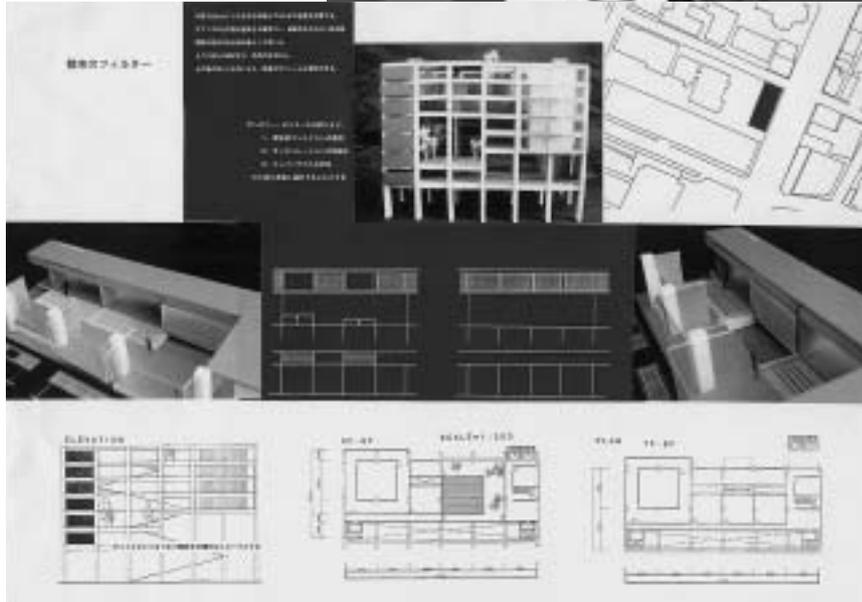


島田 正和



富田 文代

への思い入れをそこに映し込むとともに、時代の要請に対応すること。「convertibleであること」は、そのどちらも包括するものとして、新たなプログラムの提案になりうるであろう。

指導=坂 茂

プログラムの変容と再構築には、単に建築計画上のことだけではなく、材料・構造・構法の見直しが不可欠である。近年建築に対して要求される要素（例えばエコロジーの問題）が複雑になり、建築家はさまざまなコンサルタントを選び、協働し、まとめてゆく能力が重要となっている。そこで我々のユニットは、構造の齋藤研究室のスタッフと各自がチームを作り、建築の分析と再構築を進めた。

前半の第1 課題として、下記のそれぞれの構法に特色を持つ建築作品を各自が選び、様々な観点（ジオメトリー、プログラム、構造etc.）から分析した。ポンピドーセンター（R・ロジャース+R・ピアノ）、ペンシルバニア大学メディカルリサーチビル（ルイス・カーン）、ソークラウン・チャペル（フェイ・ジョーンズ）、代々木国立屋内競技場（丹下健三）分析の発表会では、ポンピドーセンターで使われたグラバー梁が開発された当時に行われたものと同じ人間の体と腕を使った力学実験を再現されたりと、齋藤研究室との協働作業は大変うまくいった。

島田正和案は、ルイス・カーンが平面・断面計画に正方形の黄金分割を使っている手法を分析により抽出した。その黄金分割された立方体に、大学とオフィスが融合した新しい教育機関のプログラムを組み込んだひとつのスタンダードな核をまず作った。それをうまく並べたり積み上げることにより設計を進めるという大変ユニークな設計手法を試みた。

富田文代案は、既存の日本大学理工学部5号館の構造フレームをそのまま残し、その中に独立した廊下側がオープンな箱（部屋）を挿入した。その箱は、室内を広く使う時には可動し、外にキャンティレバー状に飛び出し、新たに広がったスペースの床には、壁面が倒れ床となるなど、新しい可変空間への興味深いアイデアがたくさん盛り込まれていた。

るDocter-Resident-Internらの動きから導かれるダイアグラムと、L. カーンの用いた黄金分割の立体構成をオーバーラップすることで生みだされた、新しい大学のかたちである。ここではArchitect-Resident-Internのヒエラルキーが空間構成によってアーティキュレートされ、コンバーチブルにプロジェクトに対応する。

富田 文代

場所性の問題は建築を創造する上で欠かせないキーとなるが、雑多な建築が氾濫する現在、その捉え方が難しくなっている。都市の一部を構成する重要な存在として、人々のその土地

島田 正和

A. R. [Architecture Room] とは、TVドラマ『E. R.』[Emergency Room] におけ

設計演習 II

課題
プログラムの変容と再構築

4 年

担当：
坂 茂